

金魚

鈴木三重吉

青空文庫

町に金魚を賣る五月の、かうした青い長^{なが}雨^{あめ}の頃になると、しみ／＼おふさのことが思ひ出される。今日も外にはしとくと蜘蛛の糸のやうな小雨が降る。金魚の色ばかりを思ひ浮べても物淋しい。おふさを思へばうら悲しい。

二人はあの青山の裏町の、下二た間^まと二階一と間だけの小さい家^{うち}に住んでゐた。

はじめて世に出す作にかゝつてゐた私は毎晩夜學へ講義に行く外は、晝はいちんち二階に籠つて一字くゝに血も黒くなるやうな思ひをして、一つところを消したり直したりばかりして、狂人のやうになつて書いてゐた。おふさはその間下でたつた一人、悄んぼりと、下手な手習ひなぞをして坐つてゐた。今から思へばそれも半分は體の悪いせみだつたのだらうけれど、おふさはその頃は所つ中はきくしない顔ばかりして、鬱ぎ込んでゐた。

私にはおふさのさういふ心持も解つてゐた。おふさが私のところへ來てゐることが母親の方へ知れてからは、絶えず手紙で以てしつつかく責められて、一ん日も延びくした心持がしないらしいといふことは私も察^{さつ}してゐた。それでも私はあれの母親が何と言つて來ても、おふさには手紙を出させなかつた。しまひには母親は私へ當てゝさま／＼の事を言つて來る。そんなものはおふさには見せはしないけれど、母親からの手紙だと見れば、

何が書いてあるかはおふさにも解る。そんな事で、私に對してもすまない〜といふ念が、おふさの心を痛めてゐるといふことも解つてゐた。けれども私は書かうとする事が甘く書けないと無暗にいら〜して、そんな事に思ひやりもなく、罪もないおふさに當り散らすことが度々であつた。くさ〜して下へ下りて來てもおふさがたゞ自身のことばかりを考へ入つてゐるやうに、涙ぐんだ目もとを伏せて、火のない火鉢の傍に坐つてしよんぼりしてゐるのを見ると、私は、おふさが、私と私の事業とに何の同情も持たないで、自分勝手のことばかりにくよ〜してゐてもするやうに思はれて、一人土の中にでもゐるやうな、ゐたゝまれない寂しさにいら〜して、おふさの沈んだ頸えりあし足あしに髪ほつの解れさかの下つてゐるのをかこつけに、ものゝたしなみのない、自墮落な女だと言つて八釜しく叱りつけたりした。私がかれこれ半歳も入院した後あとだつたので、行李の中の二人のものが一つもなくなつてゐるやうな貧しさも、私にひがみを起させた。或時はおふさの態度を曲解して、そんなに貧乏つらが辛つらいくらゐるなら、こんなところところにゐないで出て行つてしまへと言つて、夜遅くおふさを突き出さうとしたこともあつた。

その他ほかに、いろいろなことで随分無理を言つてがみ／＼叱りつけたのも、今から思へばみんな私が悪いのだけれど、その時には、一途におふさを悪んで當り散らした。それでも

おふさはすべてが自身の罪のやうに、どんなことをされても言はれても、たゞ黙つて慄へてゐた。時には私も、おふさをひどく叱りつけた直ぐあとで、自分が無理だつた事を悔いて、おふさが涙を隠しながら、かひ／＼しく使ひなぞに出て行つたあとに、私は先刻まで彼女が仕かけてゐた乏しい解し物が束ねてあるのを寂しく見守りながら、自分のやうな男の妻になつた彼女の運命を、憫れと思ふ事も度々あつた。

けれどもその時分の私は、遂に自分自身よりより多く憫れなものを知らなかつた。私は先の女についておふさに打ち明ける事の出来ない或深い苦痛を抱いてゐた。併もそんな中で、一行／＼に血を吸ひ取られるやうな思ひをして、苦しい作を續けなければならなかつた。私はおふさを叱り附けたりした後、いきなりおふさの手を取つて、一人とめどなき涙に暮れることもあつた。私が泣けばおふさも譯を知らないなりに私のために涙ぐんだ。おふさは、自分より外にはだれ一人私がつたよりにするものがないのを知つてゐた。私がどんな事をして、どのやうな事を言つても、おふさはそれが當然のことのやうに黙つて受け入れてゐた。

併し、私だつてたゞ苛々した心持ばかりで生きてゐた譯でもない。二人はやつぱり年若い夫と妻とであつた。おふさは今でも、私のために辛かつた事は忘れ盡して、たゞ、女

として與へられたいろ／＼の享樂をのみ考へて眠つてゐてくれるやうな氣がする。それだけ私は、彼の女に對して一つも夫らしい仕向けをしてやらなかつたかのやうに、おふさに與へた苦勞ばかりを追憶して、いぢらしいあの女の不仕合せな命數を憫れに思ふ。何が彼女の得た享樂ぞ。物蔭に置かれた黒ずんだ鉢に、咲いて萎れた、質素な花のやうに寂しいあの女よ。

不仕合せなおふさは、私の作がやう／＼出來上らうとする時分になると、或日どこがどう悪いともなくふら／＼と床についた。私が作に浸つてゐた長い間のいろんな氣苦勞に疲れたのだらうと私は憫れに思つて、何もくよく／＼しないで當分じつと寢てゐて見るが、と言つて、やさしく介抱してやつた。おふさは牛乳は厭、何は厭だと言つて、何をも食べようとしな。何にも欲しくはありません、たゞかうしてじつとしてゐさせて戴けばその内には直りませう、あなたは私のことなぞに心配をなさらないで、序に早く書き上げて下さいと言ひながら、無理に起きて出て、私の食事の世話をしてくれたりする。或ときはもうすつかりよくなつたやうな氣がすると言つて、床を疊んでつれ／＼の編み物などをして坐つてゐた。

それは丁度かういふ青い小雨の續く或日であつた。私は朝から二階に閉ぢ籠つて書いて

ゐた。外を見ると、窓のぢき前の、黒ぼけた屋根に張つた蜘蛛の巣に、疎まばらに溜たまる程の小雨が、絶え間もなくじめ／＼降り頻つた。

それが、午後になつて不圖氣が附くと、いつの間にか、空の眞つ青い雨上りとなつて、久しぶりで、黄色い生いき々した日影が、窓に迫つた屋根瓦の、黒い濕り氣の上に射してゐた。

見ると、そこには、下から覗いた桐の梢の、潤ひ重なつた青葉の蔭に、雀の子が一匹、珍らしく探し當てた日向を嬉しむやうに、枝から枝に飛び移つて餘念もなく戯れてゐる。

すると下からおふさが上あがつて來て、雨が晴れて氣分がからりとなつたから、そこらあたりまで出て、買物をして來たいといふ。私が勢のいゝ返事をする、おふさは子供のやうな笑顔をして下おりて行つたが、それから大分經たつても容易に門かどぐち口の鈴りんの音がせぬ。もう出かけたのか知らず、息休め旁下りて見ると、一つしかない不斷着の帶を、着換へたネルの着物の上に結んだおふさは、小暗い三疊の鏡臺の前に俯うつ伏して泣いてゐる。どうしたのかと聞けば、おふさは涙よじに汚れた顔を上げて、髪かみが澤山抜けるから悲しいといふ。こんな、いくらでも抜けるんですのと言ひながら、油染しみた櫛くしに引つかゝつた抜け毛を見せる。片方の手にも、抜けたのを溜めて持つてゐる。私は、そんな下らない事に泣く奴やつがあるも

のかと、わざと作り笑ひをして言ひながら、行くなら早く行けよと勵まして出したけれど、さうして出て行く後影うしろを格子越しに見送つて、おふさが前と較べて、くつきりと力なげに瘦せたのを見て、それがみんな自分のした事のやうに、濟まないやうな憫れな心持がした。いつもは見馴れて何なんとも思はないでゐたけれど、今氣が附いて見ると、いかにも脆い姿になつてゐる。何を買ひに行くのだから私もそこらまで附いて行つてやらうかと思ふ。けれどもその内におふさは露路を出てしまつた。

私は再び二階へ上つたけれど、おふさが歸るまでは何だか落ちつかれなかつた。書きかけてもペンが動かないので、紙の上へ意味のない悪戯いたづら書きをしてゐる内に、いつしか、憫れなあの女の、私についての長い苦勞のあとが、考へるともなく考へ浮べられた。

どこまで行つたものか、いつまでもおふさは歸らない。もう屋根に當る日足も段々と夕方に近く蔭ばみになるのにまだ歸つて來ない。私は氣になるから表通りまで出て、傘屋の店先に立つて、通りの兩方を見　はした。

すると丁度向うからおふさがとぼくと歸つて來る。金魚を買つて來たらしい。硝子入れものを糸で下さげて、悄んぼりと歸つて來る。私は二人がより早く近づき得るために、こちらからも歩いて行つた。

どこまで行つたのかと聞くと、私^{あたし}どうしたんですか、歸る途中で急に息が苦しくなつて歩けなくなつたものですから、どうしたらいいかと思つて、少らくあそこのあるところまで休んでみました、すみませんがこれを持つて下さいませんか、と金魚の入れものを渡すのであつた。眞つ蒼い苦しきうな顔をしてゐる。何^{なん}ならこの足で直ぐ醫者へ伴^{つち}つて行つて、見て貰つて來ようぢやないかと、私は氣を引き立てるやうにさう言つたが、それよりも早く家へ歸つて横になりたい、醫者へ行かなければならないやうなら、明日^{あす}にでも行けば濟む事だからと言つて、おふさはその儘一緒に家^{うち}へ歸つた。

おい、大丈夫か、しつかりしろと、私は障子につかまつて上るおふさにさう言ひながら、押入れから蒲團を出して敷いてやると、おふさは、おや、すみません、あなたにそんな事をして頂いてはと、そのまゝ崩れるやうに蒲團の上に伏^ふせつたかと思ふと、不意にがぶりと敷蒲團の上に血を吐き出した。

その時の私の愕きを、私は今でもたつた昨夜の事のやうに目に浮べ得る。じつとしてゐよ、かもふものか蒲團ぐらゐ、もう吐きたくはないか、いゝのか、と言つたきり、自分も涙ぐんで、おふさの俯^{うつ}伏した背中を抱くやうにしてゐた。おふさはおろゝと泣いて、私 はもうどうなつてもいゝけれど、私が寢附けばあなたのお仕事かと、僅かにさう言つて、

絶え入るやうに泣き崩れた。

その夜、私はじつとおふさの枕元に坐つたまゝ、おふさが力のない目を閉ぢて、やう／＼と微かな寢息になつた蒼ざめた眠りを見護つた。私は夜中過までまんじりともしらずに、夜が更けると、おふさはかうして何日かの後にたうと亡くなつてしまふのではあるまいかと考へた。枕もとには、夕方おふさが買つて來た金魚が、夜つぴて藥壇と共に並べて置いてあつた。

金魚の色はいつ思ひ出してもうら悲しい。おふさを思へばうら悲しい。

(明治四十四年六月)

青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉全集 第二巻」岩波書店

1938（昭和13）年5月15日第1刷発行

1982（昭和57）年2月8日第2刷発行

入力：林 幸雄

校正：noriko saito

2010年7月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

金魚

鈴木三重吉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>